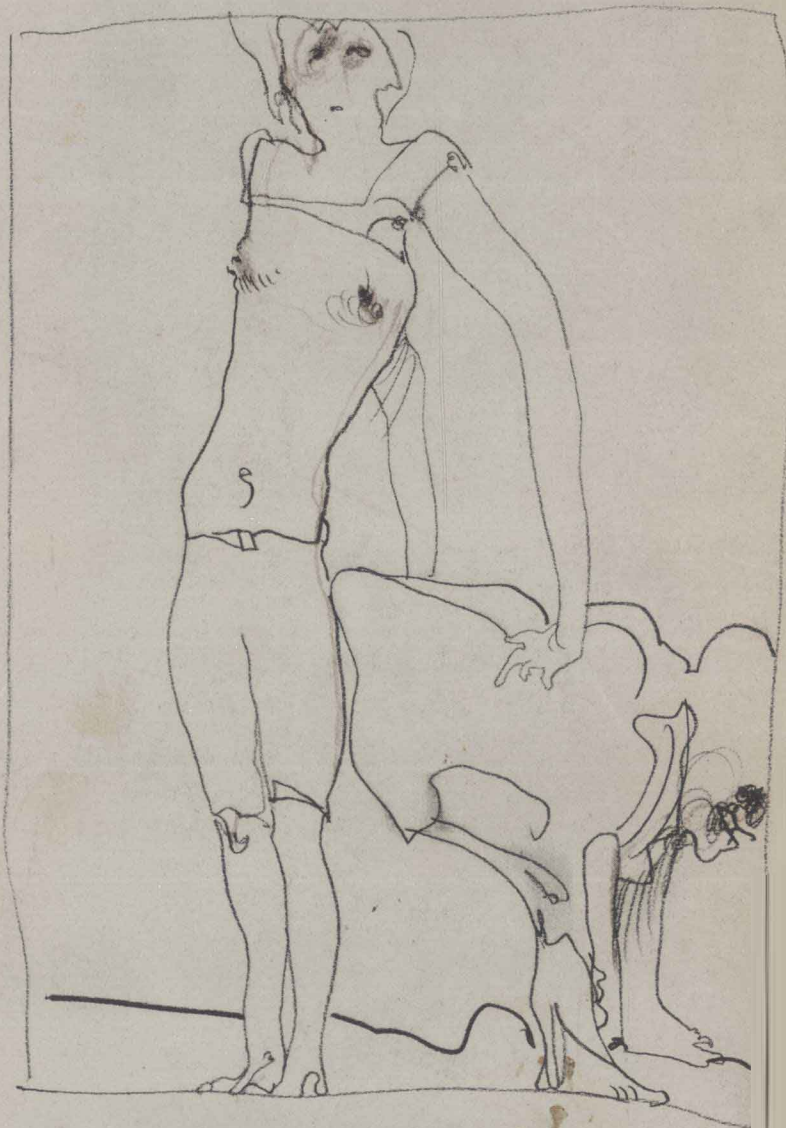


青野 聰・純文学長篇小説

試みのユダヤ・コムプレックス



純文学長篇小説

試みのユダヤ・コンプレックス

青野 聰

文藝春秋版

著者略歴 1943年東京に生まる。早稲田大学
文学部演劇専修を中退。フランスに遊学，帰国
後フリーライターとなる。1978年「母と子の契
約」を発表，芥川賞候補となる。翌79年，「愚
者の夜」で第81回芥川賞を受賞。他に著書とし
て「天地報道」「さまよえる日本人とオレンジ
色の海」がある。

試みのユダヤ・コムプレックス

1981年2月15日 第1刷

著 者 青野 聡

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 電話265-1211 (代)

定価・1500 円

印刷・凸版印刷株式会社

製本・矢嶋製本株式会社

©Soh Aono 1981 printed in Japan

試みのユダヤ・コムプレックス

I・登場

窓の下の壁ぎわにマットを敷き半ズボンひとつで横になっていた若木雁司は、巴ともえが外から差し入れたソケットをずると引きこんでタコ足に接続した。巴は二本のユーカリのあいだに置いた洗濯機の方へ、ゆっくりと歩いていった。赤いブラウスで大きく垂れた乳房をかくし、下は切口の糸がほつれたままの短いジーンズをはいていた。真夏の正午の静けさに窪みをつける電気仕掛けの渦は、十日ほど前に熊吉・巴・息子の大海おほみが隣りの「母屋」に引っ越してきてから耳にするようになった音である。前の家を家賃滞納と管理を怠って汚し放題にしたために追いだされたのだが、熊吉は大勢の他人たちとの共同生活が苦手なので、キャンピング・カーに改造した大型トラック「我が家」で山の中腹や原始林の中へ眠りに行って、まだ母屋には帰ってきていなかった。

雁司は、一昨日トラックからレンガを積みおろしていたときに痛めた腰をかばいながらマットの上であぐらをかいて白くぼってりした大気を眺めた。ユーカリが細長い葉を泣くように垂らしていた。

母屋と、物置きを改造した「離れ」は、「エルサレム」と呼ばれている町から自衛隊演習場と米軍基地のあいだの舗装道路を、「シナイ山」と呼ばれている日本一高い休火山に向って上り、松林が切れたところから三キロほど脇道に入った荒野の中にある。喬木はこのユーカリが最後で、あとは眼につく植物といったらヤマアラシのように低く構えた棘の多い灌木と、子供が描く兎や狸のように丸味

をおびた形のサボテンである。

「がぁーん・じいーい！ レディから国際電話だよ」

明日香の太い声が届いた、と思うとすぐに素肌の上に胸あてのついたデニムの作業衣をじかに着た彼女が離れの勝手口にあらわれ、部屋の入口に立つと、粘土を握る手の甲で臉をこすって瞳から洩れる好奇心を抑えた。

「背中の調子はどーお、まだ身動きとれない感じ？」

雁司は差し込まれた明日香の肉づきのいい腕をつかんで立ちあがった。

「昨日なんかこれからいったいどうなるもんかと思ってたけどね」

日射しは強くなっているが日なたと日かげの境界はぼんやりとしていた。雁司が明日香・彦丸のいる母屋に転がりこんだ一カ月以前の方が空気は澄みわたって空は高かった。シナイ山の稜線は赤錆色に切りたっていたし、サボテンは薄気味悪く見えるほど新鮮だった。それに比べると夏は太陽の白熱した叫びが宇宙に反響していても、事物の輪郭は大気が含むガスに毒されてぶよっとしている。

雁司は裸足で人の秩序が行き届いてなんとなく庭らしくみえる荒地を母屋へと歩いた。囲いの中の太目の牝馬「伯爵夫人」はろばのようにおとなしく、下の演習場の方へ頭を向けて瞑想していた。ガレージを改造したアトリエの中では長身の彦丸がろくろを引いていた。彼が飼うセッター犬「ミチコ」はつきまとう彼女の九匹の黒い仔犬をふりほどいて物蔭から物蔭へと逃げ回っていた。見た感じでは九匹ともなめし草のようにつるつるしていた。シェパードの血がいくらか入った「オヨメ」の方は彼女の三匹の仔犬といっしょに、テーブルがわりにしている土木用のワイヤが巻いてあった巨大な糸巻の下に潜りこんでいた。雁司と共同で離れを借りている麻美・玉五郎の飼犬である。一日ちがいで生まれたこちらの三匹は毛足が長く、何かというとすぐにひっくりかえって腹を見せた。

母屋の居間に入ると、象の脚のような丸木をつけたテーブルのまわりにのびのびとした笑いの波紋が広がっていた。受話器のすぐそばに坐った巴は大海を膝の上に抱きあげていた。大海は母親に似てほくろの多い赤ん坊である。カーキ色の半ズボンをはいた麻美はきちんとベンチに坐って脚を組み、横目で雁司を見つめた。少女時代にバレーの練習に励んだという彼女の軀はほっそりとして、淡く陽に焼けた肌には中性的な魅力があった。硬く突きでた乳房の黒い乳首は縁なし眼鏡の奥にある彼女の黒目よりはるかに大きい。読みかけた文庫本には葉のかわりに古い福引券がはさんであった。明日香は台所の調理台にもたれかかって右手の親指を根元までくわえて雁司の口もとに視線を集中した。どうしても治らない彼女の癖で、手紙を書いたり本を読んだりするときには二時間でも三時間でも指がふやけるまでしゃぶるのである。雁司は女たちから裁かれるような気持になって眼にとまった脚の長い丸椅子に坐った。

電話はカリフォルニア州バークレーにいる雁司の妻ナオミからだった。

低い声で電話の相手に応答したあとで雁司は明日香の真似をして親指をくわえ、おもいきり鼻の下を長くのばした。明日香はこんもりとした円い軀を縮め、サーモン・ピンクになった親指を中にいれてげんこつをつくった。目尻から頬にかけて羞じらいの小皺が寄っていた。もう三十を越えているのである、彼女は。

「女房のナオミが来月とれる四週間の休暇を利用しておれに会いたいそうだ」

雁司は受話器を置くと、流しで水をひと口飲んでから明日香に言った。水は思わず目の前にかざして透明であることをたしかめてみたくなるほど生ぬるかった。冷たければ清潔と思いこんでいたのでないのだが。

「素晴しいじゃないの！」

明日香は頭を小さく横に振って雁司をまじまじと見つめた。狭い額は皺が寄ってさらに狭くなり、眼が大きく見開かれていた。

「それでなんと答えたのさ」

「三週間や四週間ばかり来たって心理的に動揺するだけのことだろうから来ない方がいいんじゃないかなあ」

「あんたそう言ったの？ そうは言ってなかったよお」

明日香は言い、冷蔵庫をどすんと叩いてから巴に聞いた。

「ねえ、あんたはすぐそばにいたからよく聞こえたよね、雁司はそんなこと言ってなかったよね？」
巴は彼女の特異な声帯を開き高音と低音を織りまぜて笑った。

「ときおり英語なんぞ混じえてぼそぼそろろ、わざと長ったらしい単語をつかってたからわかんなかったわよ」

「うん、そうは言わなかった。だけど手紙にはそう書くよ。電話で直接話しちゃうと、手紙を書く相手とは別人みたいになって、なんとなく馴れあっちゃうんだよね」

雁司はくもり硝子の割れ目から伯爵夫人のほうへ視線を泳がせて言った。

「とにかくおめでたい話じゃないの。アメリカからわざわざこんなところまで訪ねてくるんだから」

冷蔵庫を明ける明日香の腋毛の先端に汗の粒が鈴なりになっていた。中にあるのはナイロン袋に入った食パンと、搾りたての山羊の乳が入ったジュラルミンの大鍋である。冷凍庫はドアが外れたままなので氷もできていない。

「あーあ、あたしたちは飢え死するんだわ」

明日香は一転してくたびれはてたような声を出した。

「雁司のレディがくると知って美歩がどう反応するか見ものだわね」

巴がにんまりとした好奇心を浮かべて言った。

「ふっ、美歩嬢か。あれには参るよねえ」

明日香はひと息いれて巴の言葉の方向をかえた。

流しには作風のちがう二種類の器が重なりあって蛇口の高さにまで達しようとしていた。ひとつはより単純な様式を追求しようとしている明日香のもの。だいたいが無地で粗い土の感触を表面に残していた。もうひとつは対照的に技巧に凝り、鮮やかな色彩で鳥や花が描かれていた。調理台の皿たてにある直径が三十センチ以上ある大皿には、コバルト色でふちどられた鳩を思わせる鳥に大きな赤いくちばしがついていた。着想は自由、鳥の目や翼も自由を謳っているとれるが、かならずしも食卓に向くとはいえなかった。

この派手な器の製作者が浴室の向いの部屋で寝起きしている美歩だった。作品にあらわれているようにふたりの性格は異って、雁司は着いた日から二人の自我が危うく衝突しかけるのを何度も目撃してきた。明日香は言ったことがあった。美歩は男には苦勞してんだよ、へば絵かきと大恋愛して逃げられたりしてさ。そいつはちんぼこが硬くなりさすりゃいいと思ってるろくでもない野郎で、そのくせ絵筆をちんぼこにしぼりつけることもしないからろくな絵も描きゃしない、入れあげたあとで捨てられたので美歩の落胆ぶりは見ていられなかったよ、髪の毛は抜けるし、食事はしないしでさ。それでこの家にくるように誘ってあげたんだよ、あたしたちだってどうせ居候に占領されるなら家賃を分担してくれる仲間が来てくれた方が助かるもんね、いちおう菜食主義者だしさ。ここにはいつもごろごろ誰かしらいるだろう？ 温いムードに包まれて美歩はみるみる恢復してね、はじめの一、二カ月はしあわせいっぱいだったよ、だけどそのあとがねえ。

「それであなたのナオミさんはいつくるの？」

麻美が聞いた。福引券をはさんだ文庫本はボードレールの詩集だった。

まだ決定したわけじゃないよと前置きして雁司はナオミが一方的に告げた、だいたいの日附を言った。

「ちょうどあたしと玉ちゃんが出たあとだわ、離れの部屋がひとつ空くから都合がいいわね」

麻美・玉五郎は日本の外の広い世界へ向って旅立つことを決めていた。元自動車整備工の玉五郎は、麻美とともに千葉からフォルクスワーゲンの整備工具一式と生活必需品をトラックに積んで、エルサレムに来てすでに二年間働いていた。そのあいだに明日香・彦丸をはじめ海外を旅してきた者たちと知りあい、彼らがそよ風のように語った旅の経験談に大いに啓発されたのだった。旅人と自認する者は出会って嗅覚が合いさえすればやたらと出発をそのかすものである。話し手にとってのそよ風は聞き手にとっては貿易風にも等しく、語る言葉には喚起力があり、夢みる者の心はすぐに誘いだされてしまう。雁司もまた玉五郎にたいしてはそのかす者になっていた。旅は無用だと自分ではわかっていても、これから出発しようとする青年の胸の震えを感知するとわざと昂奮させるようなことを言う。あるとき玉五郎は言ったものだった。ぼくは自動車のマシンを相手に手を充分に汚してしまった。オイル交換のために自動車の下に潜りこむたびにマシンにおまんこやられていたような気分になるんだ、あれはもう飽きあきです！ ポール・ニザンという人は、人は飽きあきしたときに旅に出る、と言ってるそうですね、ぼくは正しいと思うな。

「勝手な女だよなあ、おれに一方的に見切りをつけて好きな男といっしょになりながら、今度はやっぱり一方的におれに会いにくるというんだから」

「なーに言ってるの。もそもそと中年のギャング・スターみたいな声で話したりしてさ。あんただっ

てちゃっかり結婚指輪を外したじゃないのさ、たしかここに来て三日目か四日目だったね、あたしは気がついてたよ。レディがくるようになったら、どうせまた薬指にはめるんだろう？」

明日香は言つて口もとをかすかに歪めた。それから食卓の夏みかんに手をのばし、むしった皮で頬をこすりながら居間の二人に向つて言つた。

「あたしはおぼえてるよ、せっかく自分の国に帰ってきたのにひとりぼっちで寝るんじゃ淋しいだろうと思つて、雁司にもガール・フレンドが要るね、と言つたんだよ。そしたらね、なんと応えたと思う？ おれには女房がいるよと言つて薬指を見せたのね。あたしが、どこにいるのさ、夜寝るときにそばにいなきゃしようがないじゃないの、とやりかえしたら、じつになんともいえない人を小馬鹿にした顔をしてねえ。そしていかにも雁司らしく言つたよね、明日香の論理はすっきりしているなあ、反駁するよりも負ける方がいいって。ああ、想ひだした、あのときは早くも美歩が雁司にモーションをかけてたんだわ」

「女房がいるとは言つたけど威勢のいい心理状態じゃなかったよ。そりゃあ、いつだって熱情をそそる相手は欲しいさ。だけどあのときは美歩を押しつけられるように思つたんだよ」

雁司をだしにして楽しく話そうとした明日香の意図は実らなかつた。巴は立ちあがつておむつをとつた大海をインドやアフリカの婦人がするように横抱きに腰にのせた。

「暑いわねえ、どこかにクーラーが落ちてないかしら。明日香、洗濯物をだしなさいよ、洗濯機に入れといてあげるわ」

母屋の中は陳列室を兼ねた玄関と居間と台所が東西に並び、中廊下をへだてて二つのベッド・ルームとサロンが並行していた。畳の部屋はひとつもない。明日香・彦丸のベッド・ルームはいちばん乱雑で、いつ見てもさながら十人もの子供たちがあわてて服を脱ぎ捨てていった脱衣場のようなのである。

ふたりともよほどの清浄化の衝動が訪れてくれないかぎり、は整理整頓ができない性格なのである。

「ねえ、たばこ持ってる？」

巴は明日香が地曳網のように全身で衣類をかき集めているのを見ながら声を落して雁司に聞いた。

「おれは止めてるんだ。もう一カ月になるから完全に止めたと言えるな」

巴は感心したそぶりも見せなかった。雁司は質問の意味をやや遅れて理解し、半ズボンのポケットから小さく折った五百円札をだした。巴は大海を抱いている手に五百円札をはさみ、トラックを借りるわよと明日香に声をかけて勝手口から出ていった。

「彦丸がどんなにいやがっても誰かしらたばこを喫む人がいるもんだね」

雁司は黙って二人のやりとりを見ていた麻美に笑いかけた。金をだしたことにたいしての無意味な弁解の笑いでもあった。つねづね麻美・玉五郎は、慈善家ぶっていると云って雁司の金の使い方を批判していたのである。

「本当にあなた禁煙に成功したのね。意志が強いんだわ」

「日本に帰ってきて行ったたったひとつの行為が禁煙なんだからおかしなもんだよね。なにになに、ないということをしたわけだ」

雁司は言って明日香にも聞こえるように声を大きくした。

「電話であいつに言ってやればよかった、おれはたばこを止めたぞって。おれが誇れるのはこれくらいだからな。彼女はくりかえしくりかえし挑戦しては失敗しているんだ」

明日香は籠いっぱいに衣類を抱えてきた。調理台に半分のせ、大きな眼で向いの雁司を眺めまわした。

「あんたも彦丸や熊吉や玉ちゃんやそこいらにごろごろいる男たちのひとりってことだね。なにごと

にも動じないふうで、最高にクールな男ではあるけど、やっぱり同じなんだよ」

「それはいいことなの？ それとも悪いこと？」

雁司は無意識に籠に手をそえて聞いた。

「よくも悪くもないよ。あんたもあたしたちと同じで低次元の悩みをかかえてるってこと。ほっとしたよ」

「クールに見えたのはおれに深く悩む能力がないからなんだ。沈みきれずにブカツと浮きあがって阿呆のように漂流してるだけなんだよ。いったい何がどうなったのか、日本に着いて税関を通り、出口の両側に鳥の翼のように並ぶ出迎えの人々を縫ってロビーに出たときから、ずっとこうなんだ。あのときから希望という言葉をどのように使ったらよいかわからない状態はちっとも変わってない、希望を持つことを希望する、このようにつなぎあわせてのみ納得できる状態は。かっこよく言えば帰り着くための新たな旅立ちってやつだよ。膝関節は足が地から浮きあがる寂しさをテーマにしているいつも踊ってるよ、ほら」

雁司は脚をブルブル震わせて膝と膝をぶつけた。そして唇を横に引いて安手の笑顔をつくった。

「しかしもし日本に来たらナオミはおれが精悍になってるんできつと驚くよ、陽に焼けたし、軀はどことなくぴりりと引きしまった感じだし。明日香はおれがここに来た初日、数年ぶりで再会したとき第一声でなんと言ったかおぼえているかい？ なんだかポチャポチャしちゃったみたい、色も白くなって髪も短くなって、これで白い開襟シャツを着たら中国の卓球代表団のひとりとまちがえるわ。そう言ったんだぜ」

「あたしは五分前に言ったことだって忘れるタチだからね」

明日香は言って困ったように眼を伏せ、舌の先を上唇の裏に押しこんだ。

「そう言えばそうだったわね。しもぶくれのおぼっちゃんという印象だったわ。玉ちゃんよりも七つも年上だなんてとても信じられなかったもの」

静かに笑っていた麻美が癖のない透き通った声で言った。背すじを伸ばしたまま静止している彼女の軀には無理な力が入っていないかった。

「年齢なんて社会的なもんよ。外国にいつてゐるあいだは齡をとらないのさ。日本で過ごした年月だけでいえばおれと玉五郎と彦丸はほぼ同い齡だよ」

雁司は明日香が手を放したので籠を両腕で抱きあげ、勝手口のドアを足で蹴った。立ったまま持つぶんには腰は痛くなかった。ミチコが遺跡のように崩れたまま放置されている楽焼き用の小さな窯を足場にして、オレンジ色のナイロン地で覆われたレンガの山に跳びのった。そのナイロン地は、米軍から放出された修繕する価値のないクラシックなバラシユートである。

「あー暑い暑い。こんなに汗かくんなら腋の下に穴あけて一気にじゃーって流しちゃいたいよ」

明日香は太い声で言い、籠からつまんだ粘土のついたタオルを首に巻きつけ、アトリエの彦丸に声をかけた。

「雁司も普通の男だっことがわかったよ。来月にはアメリカにいるレディが会いにくるんだってさ。電話がかかってきただけで歓喜してあたふたしているよ」

彦丸は臉を閉じてこっくりとうなずいた。顔半分を覆っているひげは白い埃りをあびてヨガ行者を想わせ、まことに彦丸にぴったりだった。うしろの棚には壺や茶碗や花器、形を与えられたばかりの濡れた粘土が並んでいた。アメリカン・クラブが暑いさかりに催すバザールにエルサレムに住むアルティザンは出品を頼まれていたのだ。みんなかなり早くから制作に入っていたが、明日香・彦丸は一昨日まで他の仕事に集中していたので、ろくろを引きだしたのは昨日からだった。彦丸は眼を開ける

とクー・クーと鼻の奥を鳴らして立ちあがり、一メートル八十の長身を前屈みにして明日香のろくろをまたぎ、テーブルのテーブルコーダーをセットした。彼らの仕事をたすけるジャズのピアノ・ソロが流れた。

雁司は無口な彦丸を相手にすると喋る言葉に窮した。グアテマラ国の深い森の中にある湖のほとりの部落で出会ったときからそうだった。彼らは郵便貯金に結婚の祝い金をプラスして新婚旅行に出て、合衆国南部とメキシコ、グアテマラを回りながらインディアンの陶芸を勉強していた。彦丸はじっさいの年齢よりもずっと老けて見えた。雁司は南アメリカへと下る途中、前進前進と唱える旅人の血はまだ健在で、舌は滑らかに回転し、明日香が相手ならば何時間でもお喋りができた。しかし彦丸は人間関係や相互理解の一切を腫に委せているようなので、彼とふたりきりになると妙に息ぐるしかった。彼は電気もきいていないその部落で夕暮になるとフルートと尺八を吹いた。インディオの女性から刺繍や織物を教わって自分でもつくっていた。そして今は焼きものをつくる。何にたいしても彼はアマチュアとして関わっていた。ぼくは人のためにになにかしていれば満足なんだ、と雁司に言ったこともあった。

「背中が痛いつていうのに何やってんのよ！」

明日香は走ってきて雁司の腕から籠を奪いとった。

巴が運転するトラックと玉五郎のトラックがつづいて帰ってきて急ににぎやかになった。巴は左手で大海を抑えつけ、片手でハンドルを切ってユーカリの脇でサイド・ブレーキを引いた。たばこのおつりは冷えた罐ビールになっていた。脱水機の回転がクライマックスに達して土台のレンガといっしょに震えていた。

「雁司がぜひ持っていけと言うので注文しといったスエーデン製のラジウス、とうとう手に入れた。あ

とはリュックと寝袋を買うだけでぼくの出発準備は完了……」

玉五郎はひげの下の唇を甘くゆるめ、義歯のようにきれいに揃った歯を見せて笑った。頬から首、肩がねっとりとした汗で光っていた。すぐに眉間に楔形の皺が刻まれた。彼は母屋から出てきた麻美に向って人差し指を立ててゆっくりと言った。

「順番に言うよ、まず犬のチビの方を始末する、二匹は貰い手がきまった。今すぐに欲しいそうだ。

あとの一匹は『宝瓶宮』の店の前で抱いて立ってれば十分もしないうちに貰い手があらわれるそうだ。それから、このトラックをよく洗ってオイル交換しないといけない、つまり、あと二時間もしたらこれは美歩のものになるんだ、彼女は金を払うからそのかわりに新品同様に磨きあげろ、というニュースで言ったよ。わかったか麻美？ よし、それじゃ出かけよう、麻美は仔犬をつかまえてきてくれ」

玉五郎は彦丸の手を借りて離れからフォルクスワーゲン用の工具一式を入れた赤いスチール製の整理箱を運んできた。二段に別れていて下段の方は約八十キロである。彼は旅立ちを実行に移す段になってから、しばしば雁司の前で旅の資金をどうやってつくるかの皮算用をしていた。このトラックで三十万入る、三十万は安いぜ、美歩は大喜びだ、それにフォルクスワーゲン用の工具一式を二十五万で売る、これも大安売りだ。料理人は庖丁さえ持てば庖丁無宿、作家はペンさえ持てばペン無宿になれるけど自動車の整備無宿は最低ぼくが持っている工具だけはあるんだ。それからサイクリング車を二万で売る。ギブソンのギターも売る。これは三万。へっへ、千葉に帰れば貯金もあるからなんだかんたんで百五十万くらいは持っていけそうだな、と。

麻美は離れへ入って色あせた緑色のTシャツを着てくると、日蔭で転がりまわる仔犬を一匹ずつ抱きあげて荷台にいった。仔犬たちには貰い手はいるが、のっそりとした母犬のオヨメの未来は暗かっ